

症例は、44 才、男性。某施設に入所中、吐血にて当院外来受診、GIFにて食道静脈瘤、胃潰瘍 (A2×2) 確認、併行して行われた腹部エコーにて、肝 S5-6 に ϕ 70mm 大の hyperechoic tumor 並びに同部位に近接し、 ϕ 15mm 大の hypoechoic lesion を認めた。

血液検査にては、PIVKA-II 5000mAU/ml 以上、AFP 23ng/ml、AFP-L3 は陰性、軽度のトランスアミナーゼの上昇を認めた。本例は、main tumor と肝内多発性娘結節 (IM) が存在し、かつ主病変の近傍に異時多発型と判断される高分化型病変を合併した興味ある Case と思慮された。MRI、CT、腹部血管造影、病理組織所見にて、各々の characterization を呈示したい。

13 SMANCS-TACE 後の再発巣の画像診断に苦慮した肝細胞癌の 1 例

和栗 暢生・渡辺 和彦・池田 晴夫
 岩本 靖彦・相場 恒男・米山 靖
 古川 浩一・五十嵐健太郎・月岡 恵
 大谷 哲也*・斉藤 英樹*
 橋立 英樹**

新潟市民病院消化器科
 同 外科*
 同 病理検査科**

症例は 45 歳、男性。B 型慢性肝炎を背景に、2002 年 7 月、S7 に 28mm 大の肝細胞癌 (以下 HCC) に対して SMANCS-TACE が施行された。治療 2 ヶ月後、右葉後区域に虚血性胆管炎を併発し、biloma を多数残した。その後 2004 年 5 月、S7 に再発を疑われて再入院。US、angio-CT では周囲に biloma が器質化した充実性腫瘤が多発していたため、HCC として viable な部分を特定できなかった。後区域切除を行ったところ、治療部周囲にわずかな viable HCC を認めた。

当科で 2000 年 5 月から 2004 年 4 月までに SMANCS-TACE が施行された 64 例 (のべ 97 回) で血管や胆管合併症を調査した。胆管炎は 8 例 (12.5%)、9 回 (9.3%)、biloma は本症例 1 例のみ (1.6%) であった。2 回以上血管造影施行の

41 例中、動脈狭小化が見られた症例は 26 例 (63.4%) であった。本治療による合併症はその治療効果と併せて詳細に検討されるべきと思われた。

14 シスプラチンの反復動注化学療法が著効した門脈腫瘍栓合併びまん型肝細胞癌の 1 例

加藤 卓・坪井 康紀・山内 芳樹
 横山 恒・山田 聡志・柳 雅彦
 三浦 努・高橋 達

長岡赤十字病院消化器科

症例は 56 歳、男性。約 10 年前に C 型慢性肝炎と診断され IFN 療法を受けたが改善が認められず、以後通院していなかった。2004 年 6 月に食欲不振が出現し近医受診。腹部 CT にて肝腫瘍が疑われ、7 月当科紹介初診。精査にて門脈腫瘍栓を伴うびまん型の Stage IVA の肝細胞癌と診断され当科入院。入院後より黄疸の増悪と腹水の貯留が認められるようになった。初回治療としてリザーバー埋め込みによるシスプラチン動注化学療法を施行したところ、腫瘍と門脈腫瘍栓の縮小、肝不全の改善を認め、腫瘍マーカーも PIVKA II が 5480mAU/ml から 39mAU/ml へと著減した。以後シスプラチン動注化学療法を 12 月まで 3 回施行したが、この間腫瘍の増大や肝不全の進行は認めず、PIVKA II の増加も認めなかった。門脈腫瘍栓を伴うびまん型進行肝細胞癌にシスプラチン動注化学療法が有効な症例であった。

15 長期に持続腰椎麻酔によるペインコントロールを続けている HCC 骨転移の 1 例

森 茂紀・東海林俊之・菅原 聡
 柳澤 善計・小林 隆*・諸田 哲也*
 佐藤 攻*

信楽園病院内科
 同 外科*

症例は HBV キャリアーの 59 歳、男性。H11. 1. 25、HCC にて肝左葉外側区域切除術を施行。H12. 5. 12、左腸骨転移にて左腸骨部分切除術施行。同